

学校において

ことばをたのしもう

<大阪> 越智弘子

◆二十四人の子どもたちと

入学式の前々日。入学児童の兄を担任したことがある私に保護者から電話が入った。「今Mが扁桃腺で入院してる。入学式に行けなかったらどうしよう。腎臓も検査が必要で、幼稚園でも休むことが多いで…。」私がたまたまその子の担任であることはわかるはずもなく、不安でたまらなかったのだろう。

入学式直後、二人の保護者と懇談。一人は昨日退院し、かろうじて登校してきたM。七度五分以上になると発作がおきる可能性があり、座薬の学校常備を希望される。年少時は一年に二週間しか登校できなかつたらしい。見るからに、まだ熱っぽそうなほてった顔をしている。やっと立っている感じだ。もう一人のNは、小児てんかんがあり、発作時の対応や日常の配慮すべきことなど心配されていることをお聞きした。発作が最近もあり脳波の状態もよろしくないことをとても心配されていた。目の表情が気になる。落ち着かなくおどおどしている。また、よくこけるのがわかるような体のアンバランスさ。

入学式の翌日、健康面で早急に話がしたいとの連絡が二件。懇談の場をそれぞれ持ち、保護者の話を伺う。Yは埃アレルギーが強く、できる範囲で細かな配慮をしてほしいとのこと。もう一人のKは食物アレルギーや鼓膜にチューブ挿入のため入水時の手だてをはじめ、生活もろもろの心配なことを一気に話された。

家庭訪問では、Aの母親が、大きな病院をいくつも掛け持ちしており歯や骨盤の手術をしたことや、今後も手術や定期的な検査が必要なことを涙ながらに話された。除去食希望の子が二人。発音が気になりでことばの指導を受けたいと保護者が考えられている子が三人。また、自分のことが相手にわかるように言えずに友だち関係が気になるとの心配も寄せられる。

そして、ダウン症のNちゃんがいる。簡単な指示は聞き取るが、こちらが聞き取るのは難しい。文字の読み書きは困難で、鉛筆を持つことや、指先、手首の訓練が先決。満面の笑顔でタッチをするのが大好きで「Nちゃんタッチ」と早くも子どもがネーミングしてくれた。

今年出会った二十四人の子どもたちは、特に健康面での配慮を必要とする子があまりにも多い。そして、保護者の話を聞くにつけ、大きなランドセルを背負って毎日学校にやってくる子どもたちを、なんともいとおしく思ってしまう。


「学校においてね。」「元気でおいでね。」

教室に入ってくると、「おはよう。」と抱きしめてしまいそうになる子どもたちと、ことばを楽しみ、くらしを楽しむつづり方を、今年もスタートさせたばかりだ。

◆ことばがきりり・生活がきりり


入学式の次の日、休み時間の直後、自由帳を配った。「今の休み時間にしたことを教えてほしいな。絵に描きましょう。」と。学校が嬉しい子どもたちは、探検気分全員外にとび出していた。さっそく鉛筆を握り、思い思いに描き始めた。全員の鉛筆が動いているのでホッとする。描けた子から、話を聞きとり、絵の横に私がひらがなで書きとめた。お話をしている顔と口元を見つめながら、「へえ、そうだったん。」「ふうん。」「よくおぼえてたね。」などと、初めての関わりに私も緊張気味。少ないことばの中にこめられている思いを想像しながら、そして、きりりとすることばに揺さぶられながら、どの子にも「お話ししてくれて、ありがとう。」だ。

さっそく、一枚文集にして読みあった。




つかまえた（け）
とうまくんを
つかまえた。
きょうそうも
した。

うさぎ（す）
うさぎに くさをあげた。
しゅつと くさを とられ
た。
もぐもぐ うごいていた。




じゃんぶ（ゆ）
いわの うえで
じゃんぶした。
こけそうに なった。


次の日から、午前中には下校という限られた時間の中で、絵とお話しを続けた。一人の絵とお話
しから、話の輪が広がり、友だちの名前が覚えられる。お得な時間だ。



おしゃべり（じ）
せんせいに
「あいさつしような。」
ともやくんとはな
しながら
がっこうに きた。



おにいちゃん（か）
おにいちゃんと
がっこうに きた。
おにいちゃんが、
「ここがいい。」
といって、3くみの
ところで、てをはな
して くれた。



しんでんず（た）
よこのひとを
みようとしたり、
「あたま、うごかさん
といて。」
といわれた。
めをつぶった。

てを つないだ (ゆ)
 6ねんせいの おにいちゃんが
 「てを つなごう。」
 といってくれた。
 ばあのを だしてくれた。
 ぼくも、ばあのでで
 つないだ。
 ぼくの てより おおきかった。
 てを つないで
 ぶらんこや じゃんぐるじむに
 いった。



ころがった (か)
 6ねんせいの
 おねえちゃんと
 たいやの うえにのった。
 たいやが ころがった。
 ぼくの あしも
 ころがった。

◆思い出すことと、思い出すことがあるくらし

思い出すことを日常的にやっていると、なにかしら見つけてくるようになる。

毎日の朝の健康観察は、昨日や今日の朝の出来事の一つ選んで、一人ずつ言い合う場にした。学校以外のようにすを共有し合える楽しい時間だ。その子の目をじっと見ながら聞く。そして、私にとれば、題材探しでもある。

「きのう、おとうさんと おふろに はいりました。」

「せんめんじょのおみずをとめなかつたので おとうさんに おこられました。」

「おとうとと いっしょに ねました。」

「がっこうにくるとき、のらねこを みつけました。」

「きょうのあさ、せいまいに いきました。」

「きのう、なかよしかいからかえっていると、おとうさんがむかえに きてくれました。」

「おかあさんのおなかのあかちゃんが おんなのこだったから うれしいです。」

「ともだちと かにを とりに いきました。」

「きゅうしょくのおはしを じぶんで あらいました。」

「おかあさんが びょうきです。」

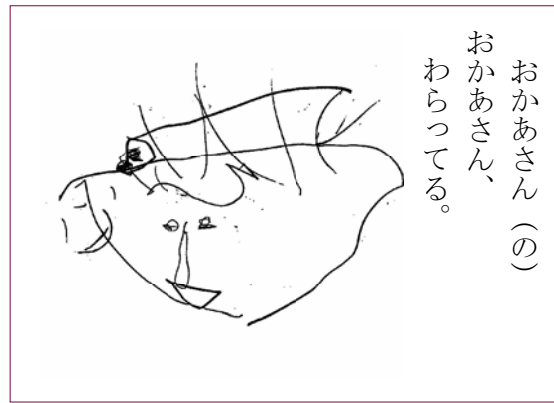
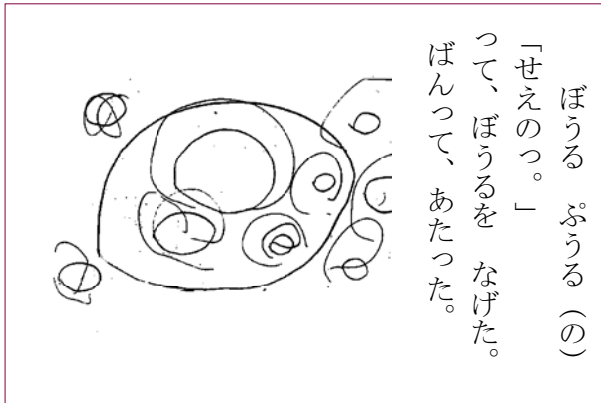
「わたしが しょうがっこうに なれてきたので、きゅうしゅうのおばあちゃんが、かえりました。」……

毎日、心ひかれる題材が子どもの口から出てくる。その一つひとつが、この子たちの成長を促す。今の時期にこそ書きとめておきたい。この子にこれだと思う時は、「そのこと、絵に描いてね。」と声をかけ、お話を聞き書きしている。

◆「Nちゃんがね……」

ダウン症のNちゃんとともにどう過ごすかは、今年のクラスの課題の一つだ。公立の保育所から学年で八人の友だちと一緒に入学してきた。

介助員さんと一緒にNちゃんの作品を作った。



Nちゃんと過ごしていると、クラスの子どもたちから、「なんでかな。」「あれっ。」と思うことが口をついで出てくる。

「なんで、ちがうへやに行くん？」

「プレールームで、どんなことしてるん？」

「Nちゃん、なに言ってるかわからへん。」

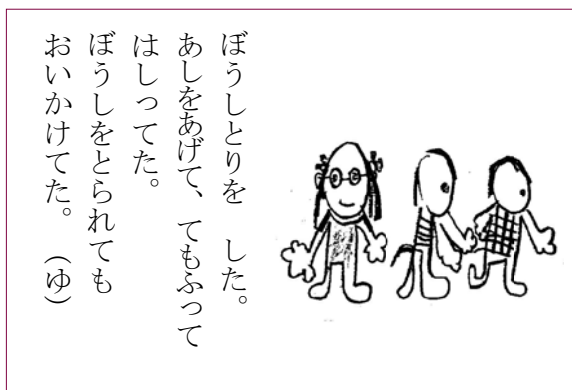
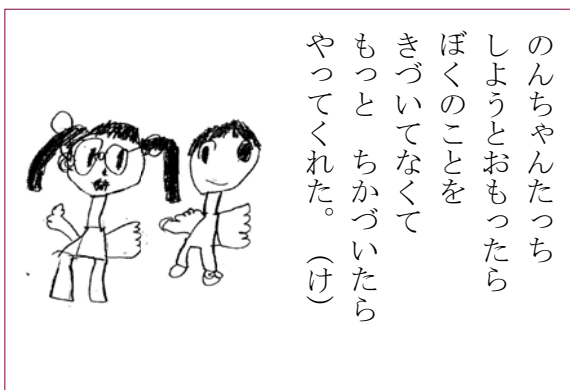
「鉛筆持てるん？」

「なんでのんちゃんは、字が書かれへんの？」

子どもたちの目で見えたこと・わかったことを大切にしてほしいと思い、とりたてて、説明はしなかった。その時々「Nちゃんのわかりやすい方法で勉強してるよ。」「Nちゃんはゆっくり大きくなるタイプなんだよ。」と話す程度だった。

二月月たち、子どもたちとNちゃんの関わりを絵に描いてみた。題は「Nちゃん」。いろんな場面での「Nちゃんとわたし」が絵に描かれた。そして、全員の絵のお話を聞き書きした。話を聞いていると、いくつかのことが実感できた。それは、Nちゃんならではのこを具体的な場面でしっかり見ているし、Nちゃんの思いを想像しているということだ。Nちゃんのこと、クラスのこと。なので、二冊目の文集として作成した。事前に、養護学級の先生に検討してもらい、もちろん保護者にも確認をした。保護者は、「これは、親がせんとあかんことやのに…。Nも親もバックアップしてもらって嬉しいです。でも、うちの子だけにならないように他の子どもたちのことも、よろしくお願ひします。」とのこと。

相互の関わりがあってこそそのクラスだから、Nちゃんの特集はクラスみんなの特集でもあるのだと保護者に伝えた。当事者の問題ではなく、周りの人の問題だということは、いろいろな事象で明らかだ。しかも、まとめでもなんでもなく、一通過点であり、これから一年かけて、取り組んでいく大切な一つなのだから。



のんちゃんが つくえのうえ
に らんどせるを どすんと
おいた。
のんちゃんは、にこっとした。
のんちゃんがわらったから、
ぼくもわらった。(一)

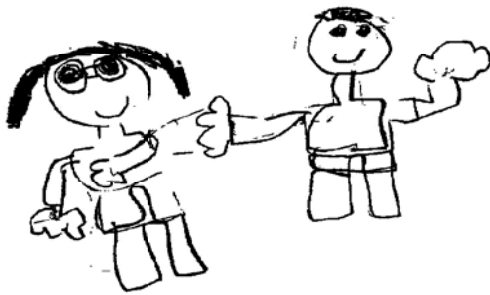


のんちゃんが えをかい
てた。
すずきせんせい
となりで じっと みて
いた。
のんちゃんは わらつて
た。すずきせんせいも
わらつてた。(あ)

ミッキーマウスのきよくで
あるくとき、
のんちゃんはわらつてた。
てをつないだ。
のんちゃんのは、ちいさ
くて
やわらかかった。(は)



ぼうしのしっぽとりで、のんちゃんを おいかけた。
わらいながら はしつてにげた。
ぼくは おいついて、ぼうしをとった。
のんちゃんは まだ そのままはしつていった。
ぼうしをかえそうと おいかけたけど、
のんちゃんは まがるのがじょうずで、
ぼくは へたやから おいつけなかつた。
ともだちに、のんちゃんをつかまえてもらって、
やつと ぼうしが かえせた。(た)



Nちゃんを見つめる目が、友だちどうし、お互いに見つめ合い、関わりあい、つづり合っていく土壌を耕すことにつながればと願っている。

◆さあ、これから

題材を選び取る力は、常日ごろから鍛えていかなければと毎年思う。

放課後、数人の子に掲示物のお手伝いをしてもらっていると、「このこと、明日みんなに言おうな。」と誘っている。

また、「しり上がりができるようになったこと、今度言うからね。」と、クラスで最後にしり上が

りができるようになった子が教えにきてくれる。

心が動いた時の積み重ねを大事にしてほしい。

「わすれた」「何にも書くことがない」くらしよりも、「書きたい」「誰かに聞いてほしい」ものがある、くらしぶりをしてほしい。

はっとする感性を磨いてほしい。

何気ない普段のくらしの中に、値打ちのあることがいっぱいあることに気付いてほしい。

そうやって、楽しくて楽しくてたまらない一年生をつくってほしい。

体の具合と相談しながらの子どもたちに、担任として緊張が続く。

六月上旬の今。ひらがな五十音の学習はまだ途中。だけど、文章表現力をつけていくための取り組みはいつからでも、どこからでも、旬であるはず。そして、つづり方は、持久力勝負だけに息が途切れないように、「さあ、これから」がまた始まる。

